ムチャブリすたんぴーど

日和無花果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ムチャブリすたんぴーど

【Ｎコード】
Ｎ２４４６Ｅ

【作者名】
日和無花果

【あらすじ】
高校生――衆生鼎はある日、フロイライン・ビターチョコ・エクセレンツという少女と出会う。彼女は、惑星間災害に指定された八人のうちの一人だった。その出会いを境に、衆生鼎は加速度的に「非日常」へと傾倒していく――！？

01

よくよく考えてみるならば、その時の僕はあきらかにおかしかったと言わざるをえない。何故なら、常識的な人間の観点からしたらおおよそしないであろう行動を、その時のぼくはしたのだから。例えそれが、人助けに類する行動であろうとも、ぼくがした行動は常識的に考えれば――社会的に考えても――おかしなものであったのは間違いない。だから、そのことを今更ながらに言い訳なんてする気はない――むしろ、後悔と反省を山のようにしなければならないかもしれない――が、言い訳する気がないのと同じぐらい、そのことを間違いだったという気もぼくには更々ない。あの時のぼくは確かに常識的に見ればおかしかったし、客観的に見たら馬鹿そのものだったけど、それでも、その時のぼくを、今のぼくは褒めてやってもいいと思うのだ。それだけは絶対に、間違いなく、確かに言えることだと思う。

フロイライン・ビターチョコ・エクセレンツ。

この、宇宙人なんてものが当たり前のように存在し認可され、共存する社会においてなお、存在自体が可能性型超人類（ウルトラヒューマノイドタイプ）とまで呼ばれる存在。

国連なんてものを圧倒的に超える影響力と軍事力を持つ惑星間連合（スターズリンク）でさえ、もう人類ではどうしようもないと、その存在を惑星間災害指定した八人のうちの一人。

最低にして最悪の荒唐無稽。

人災にして天災たる幻想。

爆走する災禍とまで呼ばれる存在について、どうしてぼくがこう

やって語っているのかというと、それはぼくが助けた存在がまさしく彼女だったからである。まぁ、助けたというのは些か誇張が過ぎるかもしれない。そもそも、助けが必要だったのかは最後まで疑問だったし、最終的には、どちらかと言えば助けられたのはぼくのほうだったからだ。

とにかく、ぼくは彼女を助けた。それがはたして助けになったかどうかはやっぱりわからないし、ぼくが助けなければ他の誰かが助けただけのことだろうとは思う。もしくは、彼女が自分自身でなんとかしてしまったかもしれない。実際のところ、今回の件は彼女がほとんど一人でなんとかしてしまったようなものだったから、やっぱり助けにはなってなかったし、助けなんていらなかったのだろう。

それでも、今回の事件はぼくが語るのが適当だろうし、ぼくにはその責任と義務があるようにも思う。

「今回の事件」なんて大袈裟に言っているが今回の件はほとんどぼくのひとり相撲のようなもので、結局ぼくは終始傍観者であったから、事件の顛末の細かいところは実はわからない。

けど、それでいいように思う。

今回のことは、ぼくが端から端まで知っている必要はないし、この物語を語る上でもそこまでの情報は必要じゃない。

ただの蛇足だ。

蛇足ぐらいならいい。蛇に足を付けたところで、せいぜい他の爬虫類と似たものになるだけだ。そんなの、ちょっと意味が変わるだけで大本を辿れば大した違いなんかないんだから、そんなことはどうでもいい。ただ、人間に羽なんか生えたりしたらそれはもうまったく別のモノになってしまうわけで、それはやっぱり余計なものだろう。ぼくがこれから語る物語というのは、つまりはそういうものだ。

さて、これから語る物語はぼくとかの爆走の災禍、フロイライン・ビターチョコ・エクセレンツとの出会いの物語である。彼女と出会

うことによってぼくの日常は崩壊し、非日常の摩訶不思議な世界へと足を踏み入れることになる――もっとも、ぼくはもうずっと昔に足どころか体半分ぐらい突っ込んでいて、それに気付かなかっただけという間抜けだったのだが――そんなことはあまり関係のないことだろう。こういった物事は認識した瞬間から始まるのだから。

とにかく、ぼくはこの事件を契機に様々な事象に関わっていくことになってしまう。そのどれでも、ぼくは終始傍観者であったのだが、関わってしまったことに変わりはない。

変えられない事実というやつだ。

話が長くなってしまった。つまりぼくが何を言いたいのかというと、この事件は始まりでしかなかったということだ。

でしか、と言うと軽んじているように聞こえるかもしれないが断じてそんなことはない。

むしろ重い。

重たすぎるほどだ。

だが、だからこそ語らなければならない。期間としては僅か一週間足らずものだったが、体感時間としては正直一ヶ月ほどにも感じたあの時のことを。その時にぼくが彼女にしたこと、されたこと。その全てを。

ぼくはここで、語らねばならない。

02

春というのは出会いの季節であると、どこかの誰かが言っていたように思う。

確かに、春――それも四月というものは、始業式だとか入学だとか就職だとかで、とかく環境が新しいものへと変わる時期だから、一般的な感性でもそのように感じるだろうというのは想像に難くない。

だがしかし、今のぼくにはそういったことは感じられなかった。

それは別にぼくに一般的な感性がないだとか、つい先ほど誰かと別れてきたとかいうことでは、ない。

ただ単に、ぼく――衆生叶（しゅじょうかなえ）の通う私立圓城（えんじょう）高校では、一旦クラスが決まってしまえばそれが三年間適用され続けるからである。よって、今現在三年生になったばかりのぼくには当然、真新しい出会いなどはなく、クラスはおろか教室の場所すら変わらないのだった。

そんなわけで――校長を始め、各先生方によるつまらない話で構成された始業式も終わり、教室の場所を念のため一度確認した上で、ぼくは体育館を出た。

体育館を出て、渡り廊下を渡って校舎へと入る。ぼくは、三階にある教室へ向かうため、すぐそばにある階段を上り始めた。

この学校は、私立と言ってもそんなに設備がいいわけではなく、エレベータもなければ階段には手すりすらない。そのため、三階まで歩くにはそれなりに体力を要する。

そんなわけで、必然的にその歩みは緩まざるを得ない。

「せめて、手すりくらいつけてくれりゃあいいのになあ」

そうすれば、もう少し楽になりそうなものだけれど。

まあ、健康にはいいかもしれない。別にとりたてて健康に気を遣っているわけじゃあないけど。
そうして、二階から三階への階段に足を掛けたところでポン、と背中を叩かれ、
「おっはよう！！」
と、声をかけられた。
誰だコイツ朝から無駄に元気がいいなオイ。
などと思いつつ振り向くと……
そこには猫耳があった。
そう。そこにはまごうことなき猫耳の御姿があった。色は黒く、綺麗な三角の形をした耳がピンと上に伸びている。
ときおりピクピク動くのが、とても愛らしい。猫好きにはたまらないものであろうことは間違いないだろうと思う。
まあ、かくいうぼくが猫好きだからなんだけどね。そう思うの。
「？……どしたニャ。人の耳なんかじっと見て」
と、猫耳が突然しゃべりはじめた。
……いや、別にそんなことあるわけないけど。
顔だけ振り向いた状態のまま、視線を下に向ける。
そこには、女の子の顔があった。
パッチリとした眼に綺麗な顔立ち。黒い髪が俗に言うおかっぱ頭のようになっていた。
そしてその頭の上に猫耳。
完全無欠な猫娘だった。
しかもマジ耳！
彼女の後ろ側には、フラフラと揺れる尻尾も見えていた。
ああもう。この気持ちを何と言えばいいのだろう。ぼくは今のこの気持ちを表現する言葉が思いつかない。だが、そう。あえて、あえてこの気持ちを言葉にするのなら――
「ワンダホー」
みたいな感じ。

「ワンダホーって……ニャニ言ってんの衆生君」
「ああ。いやいや気にしないで。ただの独り言だからさ」
「ふーん」
そう言って、彼女――猫眼（ねこのめ）メメはぼくの隣に並んだ。
ここまでくれば分かると思うが、猫眼メメは猫娘である。
とは言っても別に彼女は、父親が目玉な、片目隠した妖怪退治のプロフェッショナルの、常に横にいる娘（こ）のように、妖怪だとかいうわけじゃない。
ただ、人間と猫人間とのハーフなだけのハナシだ。
いや、『何馬鹿なこと言ってんだコイツ』みたいな眼でぼくを見るのはチョット待って欲しい。これにはこれで深い事情みたいなものがあったりするのだから。

三十年ほど前、全世界の人類に対して、各国政府から衝撃的な事実が明かされた。
それは、地球以外の惑星にも『知的生命体』の存在が確認されたというものである。
ファースト・コンタクト。
未知との遭遇。
まあとどのつまり、ぼく達人類は宇宙人の実在を確認することができた、ということである。
まあ、このあとは色々と大変だった。
らしい。
ぼくは勿論、その当時は生まれてなど居なかったので――それどころか、母親のお腹にすら居なかったはずである。年代的に。――だから、詳しいことはわからない。だから、らしい。と、そう言うしかないわけだ。
話を元に戻そう。まあ、このあとどうなったかについてぼくが知りうる限りの歴史的出来事を簡潔に述べるのならば、『知的生命体』の存在する各惑星の代表が集まり、惑星間連合（スターズリンク）を設立。その後、各

惑星で、他の惑星住民の受け入れ等の交流を行ってきて今に至る、と。まあこういうわけなのである。
閑話休題（まあ、それはおいといて）。
つまり、彼女は宇宙人と人類との交配種（ハイブリッド）。輝かしき第一世代（ファーストチルドレン）というヤツである。
「で、読者への説明は終わったニャ？」
「そういうメタなことは言わないでください。猫眼さん」
て言うか読者ってなんだ。
「ついでに言えば、お父さんが人間でお母さんが猫人間なんだニャ」
「ああ、そうだったんだ。ぼくは獣人種の方にはついぞ合ったことがないんだけど、猫眼さんのお母さんってどんな感じ？」
ぼくのその言葉に、猫眼は「うーん」と眉間に皺（しわ）をよせながら少しの間だけ悩んで――
「猫がそのまま二足歩行してる感じ？」
と。
何故か疑問系でそう言った。
「……ああ、そう」
なんか。
なんか。さあ。
もう少し違う言い方とかなかったのだろうか。
いくらなんでもあんまりな気がするぞ、ソレ。
まったくもって身も蓋もない。
「と。長話してる場合じゃなかった。もうすぐＨＲ始まるみたいだよ」
「ニャ！ホントかニャ！」
「ホント。ホント」
そう言いながら、ぼくは「ホラ」と彼女にぼくの腕時計を見せた。
そこに示された時刻は八時四十分。この学校のＨＲは八時四十五分からであるため、必然的に残された時間はあと五分ということに

なる。
「いや、ギリギリだね。あと五分じゃ」
「ニャニ暢気(のんき)ニャこと言ってるニャ！ホラ。急ぐニャ！」
「まあまあ。落ち着いて猫眼さん。急がば回れと言うし」
「急いでるのに回り道するニャンて馬鹿のすることニャ！時間通り辿り着けなきゃ意味ないニャン！」
「……まあ、ごもっともで」
確かにその通り。
とかなんとかやっているうちに、彼女はもう三階までの階段を一気に駆け上がって行ってしまっていた。
「早くするニャン！万年遅刻者のキミと違って、ワタシは皆勤賞目指してるんだから、遅刻するわけにはいかないニャ！」
「いや。別にぼくはどうでもいいんだけど……」
と。
ぼくが適当に言い返すと――
「ムキー！なら勝手にするといいニャ！」
と言って、彼女は教室に走っていってしまった。
「……」
いや、ムキーって。
それに廊下を走ってはいけないと、君はこの間ぼくに言わなかっただろうか。
「まあ、いいか」
さて、彼女にはああ言ったが、さすがのぼくも始業式から遅刻というのはいささか拙いだろう。いくら単位計算などはしっかりしてあるとはいえ、内申にいささか響くかもしれない。
それは遠慮したいところだ。
「さて、じゃあぼくも教室に向かうとしますか」
今なら廊下を走っても、怒られることもないだろう。
そうして、ぼくは教室に向かって走り始めたのだった。

もっとも、お約束のごとくＨＲには当然遅刻したのだったけれど。

03

０３

始業式後のＨＲもつつがなく終了し、散々メメさんもからかって（からかうと凄くカワイイのだアノ人）、あとは家に帰るだけだったぼくは、しかし何故か学校の周りをうろついていた。

それは特に学校に用事があったとかそういったことではなく、単に暇を潰すための行為だったのだが、それにも既に飽き始めていた。

まあ、そんなものだろうけど。

「って言ってもなぁ……」

そもそも、別にそれほど暇をしているという訳じゃない。特段、今すぐに済まさなければならない用件などはないが、それは急を要するものではないというだけの話で、やらなければならないことは二、三ほどある。

ただ、今この時間に家に帰りたくないというだけのことだった。

「……今帰ったら確実に居るんだろうな、アノ人」

『アノ人』とは、ぼくの部屋の隣室に住む人――まあつまりは隣人だ――のことである。

ぼくの住んでいる場所というのは、鉄筋コンクリートでできた三階建てのアパートで、１フロアにつき三部屋の構成となっている。

ぼくは三階の真ん中の部屋を使用しているのだが、そのうち右側の隣人がぼくの問題とする人物である。

その名を、漁火（いさりび）いさり。

住所指定、不職。

百八十センチメートルをゆうに越す身長に、モデル顔負けのプロポーション。流れるような長い黒髪に、スラリと伸びた手足。加えて、カワイイと評されるよりはキレイと呼ばれるであろう顔立ち。

世の女性が羨み憧れ、男性なら思わず見惚れるほどの美貌の持ち主なのだが、ある一点でそのすべてを台無しにしているのだった。
曰く、傲岸不遜。
曰く、牽強付会。
まあとどのつまり、我が強いと言えばいいのか、自己が強いと言えばいいのか――もちろん、これは良い方に解釈しての話であるが――少なくとも、押しに弱い人間は付き合うべきではなく、自身のことを押しに弱いどころか引きにも弱い人間だと自負しているぼくにしてみれば、あまり頻繁に関わり合うことは遠慮したい人物なのである。
またそれでいて、人をとかく構いたがるというか、変に面倒見がいいのでタチが悪い。
何だかんだで、困っている人を放っておけないのだ。
きっと、善い人なんだろうと思う。
自己に絶対の自信があるから、他人を気にすることが出来る。その余裕がある。人に親切に出来る。
そういう人は苦手だ。
自分に自信がなく、他人を気にかけることなんて何一つできないぼくには、彼女はあまり直視したい人物ではない。
だから、アノ人は苦手だ。
もっとも、あの押しの強さが苦手であるということも否定しがたい事実ではあるが。
まあともかく、難癖こじつけ色々と理由をつけてきたが、ぼくは隣人に苦手な人がいるから帰宅を拒否していたのであった、マル。
……いや、別にカワイク言ってみたところでどうなるわけじゃないけどね？
どっちにしろ、物凄く情けない理由で帰宅拒否していることに変わりはないのだし。
「……ていうか、誰に対して言い訳してるんだろうか」
なんとなく、ため息を吐きつつ歩みを進める。それは牛歩のよう

なスピードといっても過言ではなかったが、それはぼくの精神を鑑み（かんが）て突っ込まないでくれると嬉しかったりする。
「結局のところ、ぼく一人の問題なんだけどね」
多少問題があるとはいえ、いさりさん自身は善い人なのだ。問題は、そういった人間を直視できないぼくの卑小（ひしょう）さというか、いつまでたっても成長できないぼくの人間性というか。
「ただぼくがガキなだけか……」
いつだったか、誰かにも言われた気がする。
『君はいつまでも現実も自分も知らない、無知で夢見がちな子供だね』
――と。
アレはいったい誰に言われたんだっけ……？
「――っと」
考え事をしながら歩いていたせいか、いつの間にかアパート前の横断歩道のところまで来てしまっていた。
「――信号は……、赤か」
横断歩道の前で立ち止まる。この時間、車の通行はほとんどないが、かといって赤信号を無視して横断しようと思うほど急いでいるわけじゃない。
「――って、アレ？」
信号を見上げていた視線を、ふと、下に下げる。
すると――
「……人かな、アレ」
歩道を照らす街灯の下、そこに一つの人影があった。
街灯の下とはいえ、ライトの向いてる側とは反対側に近い向きで倒れているため、シルエットでしか判断できないが、少なくとも人型のものであることだけは間違いなかった。
……人形だろうか？
だとしたら単なる不法投棄で済むのだが、本物の人間だったとしたらチト洒落にならない。

「けど、あんな馬鹿でかい人形はないか」
普通に百六十センチメートルくらいあるぞ、アレ。
そんなでかさの人形なんて、ぼくはダッチワイフくらいしかしらない。
いや別に、現実にダッチワイフなんて見たことは無いけども。
「確かめたほうがいいか……」
正直な話、嫌な予感がビンビンするんだけど。
……関わりたくねぇなぁ。
と言いつつも、関わらなければ話が進まないので（いや、話ってなんだよって感じだが）、信号が青になるのを待って急いで歩道を渡り、人（ほぼ確定）が倒れているところまで駆け寄った。
そして、その電灯の下に『彼女』はいた。
鴉の羽を思い出させるような、黒髪。
長さは腰ぐらいまであり、その左右をほんの少し結んでいる。
眠っているように眼を閉じているので眼つきはわからないが――それでも充分に整った綺麗な顔立ち。
黒いドレス――ゴスロリとでも言えばいいのか――を身にまとっている。
これだけを見ればただのカワイイ女の子にしか見えないかもしれないが、ある一点の要素が、その子の印象を一変させていた。
その露出の少ないゴスロリの所々から覗く、病的なまでの白い肌には、常人ではおおよそ理解できないような模様（、、、、、、、、、、）の刺青がびっしりと刻まれていた。
「な……な、んだ。コレ」
見ていて気持ち悪くなってくるような不可思議なカタチ。まるで、黒いヘビが体中をのたうち回っているような奇怪な模様だった。
「本当に何なんだ。刺青にしたっ「ウル賽（サイ）」――っ！」
声が聞こえたことに驚いて、おもわずそちらの方向――彼女の顔に眼を向ける。
――そこには。

さっきまで眠っていたはずの彼女が確かに眼を開けて、こちらを視ていた（、、、、）。
その紅い瞳で。
「……オマエ。一体――」
「悪舞（オマエ）デハナイ」
彼女はそうしてぼくの言葉を制し――
「ワタ詞は、フロイライン・ビターチョコ・エクセレンツ堕（ダ）」
ぼくに向かって、そう名乗った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2446e/

ムチャブリすたんぴーど

2010年10月28日07時18分発行